

## 平成24年度 幼児・児童・生徒の聴力の実態と取り組み

両角五十夫 馬杉 翠 半沢康至 久川浩太郎  
倉林 崇 石井清一 穴戸淳子

本校は、これまで、幼稚部、小学部、中学部、高等部普通科、高等部専攻科（造形芸術科、ビジネス情報科、歯科技工科）に在籍する幼児、児童、生徒の良耳平均聴力を調査し、年度ごとに記録を残してきた。こうした記録を研究紀要にも掲載することで、学校の記録として残せるとともに、全職員が聴力の実態を把握できると考えた。そこで、今年度から聴覚活用委員会のメンバーを中心に各学部の聴力検査の結果をまとめ、研究紀要に掲載しようということになった。掲載にあたっては、聴覚活用委員会委員長として聴覚活用、聴覚管理に長く携わって来られた両角五十夫先生に協力をあおいだ。

また、聴覚活用委員会として各学部でこの1年間に取り組んできたこと、実践する中で気づいたことなども、全職員に知っていただけるように、研究紀要に掲載することとした。

【キーワード】 補聴器 人工内耳 良耳平均聴力

### 1 各部の聴力の実態と取り組み

#### (1) 幼稚部

今年度の幼稚部の幼児は29名で、そのうち10名は人工内耳を装用している。人工内耳を装用している幼児の内訳は、3歳児が1名、4歳児が6名（内、1名は両耳人工内耳）、5歳児が3名である。補聴器を装用している幼児19名の良耳平均聴力は図1の通りである。

新生児聴覚スクリーニングが行われるようになり、早期に障害が発見され、補聴器装用の開始時期が早まってきている。早期から聴覚を活用することで、声質や補聴効果の面でもずいぶん変化が見られるようになってきたと感じている。

今年度から、幼稚部では、補聴器を業者に点検、清掃してもらう機会を設けることとした。補聴器の点検や清掃をしてもらうことで、補聴器の不具合や故障などもわかり、聴覚活用委員として早めに対処することができ、子どもたちの耳を大切にすることができた。

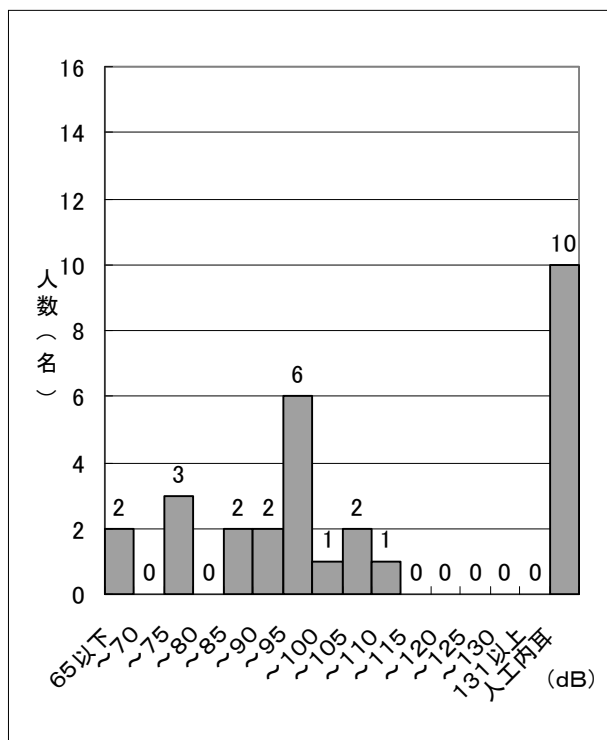


図1 幼稚部 良耳平均聴力度数分布

幼児数：29名

※人工内耳：10名（内、1名は両耳人工内耳）

#### (2) 小学部

今年度の小学部の児童は67名で、そのうち13名は人工内耳を装用している。人工内耳を装用している児童の内訳は、小2が4名、小3が5名、小4が3名、小6が1名である。補聴器を装用している児童

54名の良耳平均聴力は図2の通りである。

小学部では、毎年1学期に聴力検査、2学期に補聴器一斉点検を実施している。また、随時、各自の補聴器の具合に合わせた点検や調整を補聴相談室に依頼している。

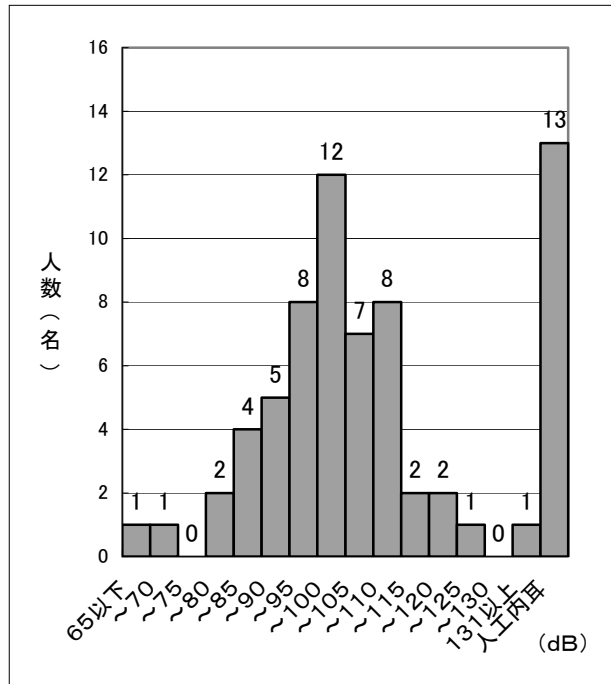


図2 小学部 良耳平均聴力度数分布

児童数：67名

※人工内耳：13名

### (3) 中学部

今年度の中学部の生徒は41名で、そのうち6名は人工内耳を装着している。人工内耳を装着している生徒の内訳は、中1が3名、中3が3名である。補聴器を装着している生徒35名の良耳平均聴力は図3の通りである。

中学部では、自立活動の時間に補聴器や聞こえに関する学習を行っている。補聴器を大切に長く使うために補聴器の管理のしかたを学び、イヤモールドの清掃や空気電池についての知識も増やしている。補聴器についての学習では、使用する補聴器にはどのような機能があるのか、友だちの補聴器はどのような種類や特徴があるのか等を調べ、発表し合う学習へと発展させている。

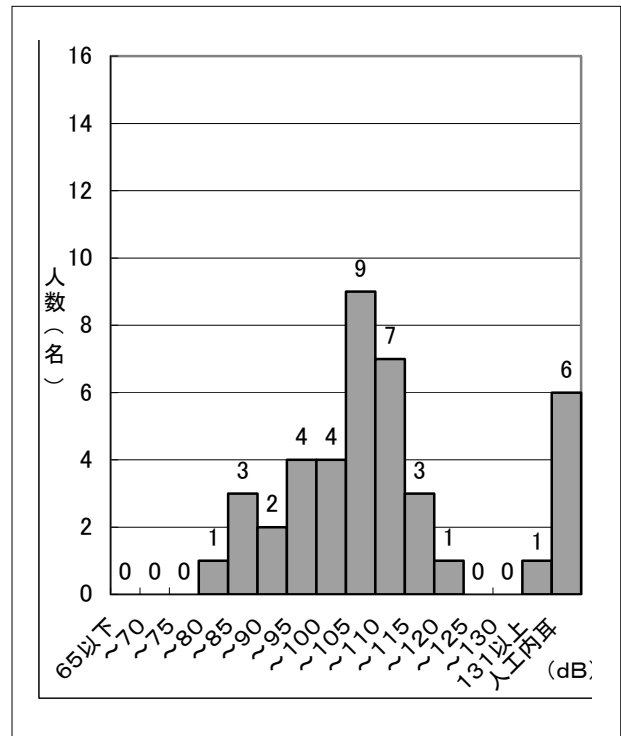


図3 中学部 良耳平均聴力度数分布

生徒数：41名

※人工内耳：6名

### (4) 高等部・普通科・専攻科(造形芸術・ビジネス情報)

今年度の高等部普通科の生徒は77名で、そのうち6名は人工内耳を装着している。人工内耳を装着している生徒の内訳は、高2が3名、高3が3名である。補聴器を装着している生徒59名の良耳平均聴力は図4の通りである。

専攻科の生徒は19名で、そのうち1名(造形2年)は人工内耳を装着している。補聴器を装着している生徒18名の良耳平均聴力は図5の通りである。

高等部・専攻科では、今年度から補聴器を業者に点検、清掃してもらう機会を設けることとした。補聴器が故障していても気づかないまま使用していたり、汚れが目立ったりなど、補聴器の手入れが疎かになっている生徒が目立った。今後も補聴器の点検、清掃を続けていきたいと考えている。

補聴器の使用に関しては、個人の判断で片耳のみの装用が多くなってきていると感じている。

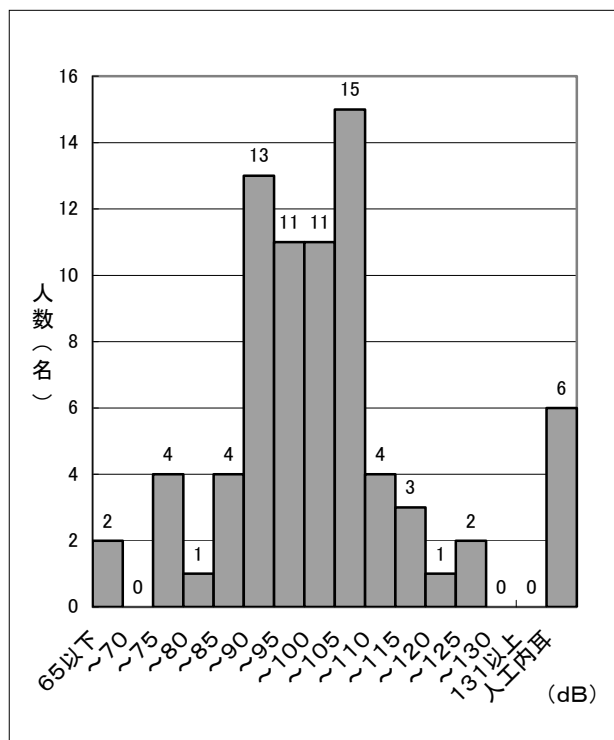


図4 高等部普通科 良耳平均聴力度数分布

生徒数：77名

※人工内耳：6名

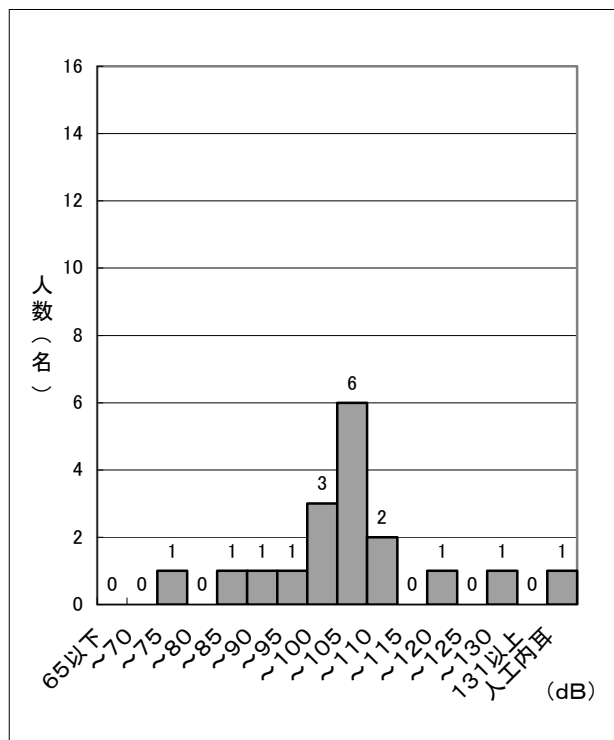


図5 造形芸術科・ビジネス情報科 良耳平均聴力度数分布

生徒数：19名（内、1名は休学中）

※人工内耳：1名

## (5) 高等部専攻科（歯科技工科）

今年度の歯科技工科の生徒は25名で、そのうち2名は人工内耳を装着している。人工内耳を装着している生徒の内訳は、1年が1名、3年が1名である。補聴器を装着している生徒23名の良耳平均聴力は図6の通りである。

数年前からの補聴器をずっと使っていて、新規に購入をする生徒が何人かいた。新しいデザインや大きさの違う補聴器が次々に出ていて、聞きたい音をより聞こえやすくする、聞こえにくい音を聞こえる閾値に調整するといったこともできるようになっている。自分にとって聞きやすい音・好きな音を既にもっている年齢であるため、補聴器の業者の方々の話を聞きながら、より本人にとって使いやすい補聴器に出会えるように努めている。

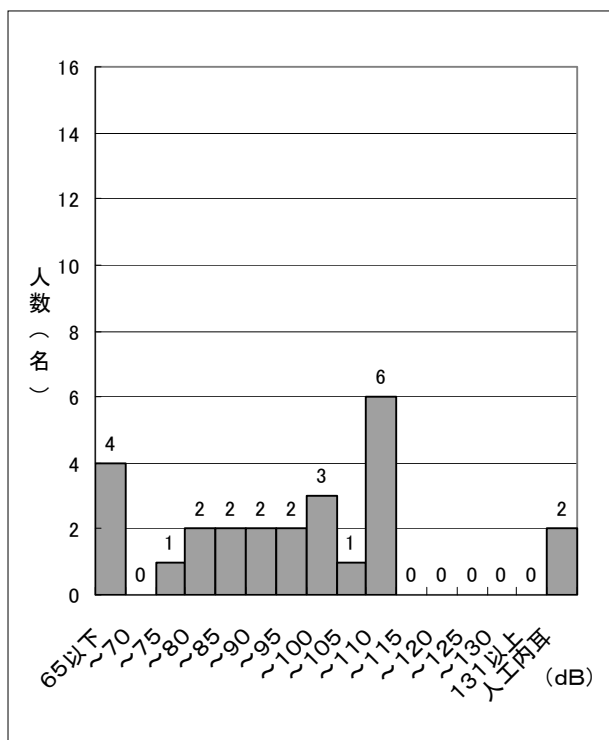


図6 歯科技工科 良耳平均聴力度数分布

生徒数：25名

※人工内耳：2名

## 2 幼児・児童・生徒の聴力の実態と人工内耳装用者の推移

### (1) 幼児・児童・生徒の聴力の実態

平成24年度の在籍者数の良耳平均聴力は、**図7**の通りである。90dBから110dBに159名が分布し、全体の約61.6%を占めている。人工内耳装用者の数は、38名で全校生徒の約15.7%である。**図8**を見てもわかるように今後も人工内耳装用者は増え続けていくことと思われる。

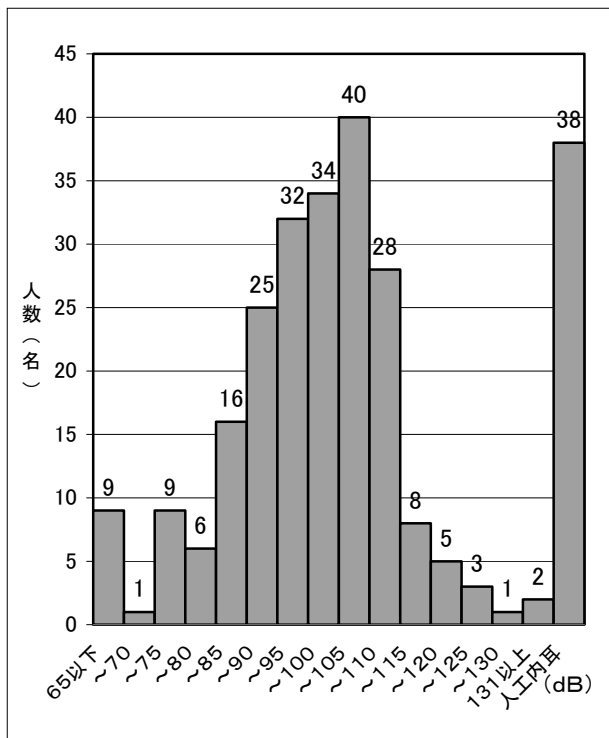


図7 幼児・児童・生徒の良耳平均聴力度数分布

在籍者数：258名（内、1名は休学中）

※人工内耳：38名（内1名両耳人工内耳）

### (2) 人工内耳装用者の推移

本校在籍児で初めて人工内耳の手術をしたのは平成9年だった。それから徐々に装用幼児、児童、生徒（以後単に装用児と記す）は増え、平成24年12月現在38名の子どもたちが人工内耳を装用している（**図8**）。**図8**からも分かるように装用児の数は増加の一途をたどっている。平成14年の装用者が5人であったことを考えると十年で約8倍となっている。これは驚異的な増加といっても過言ではない。

本校で初めての装用者が出てから5年程はほとん

ど増加していない。6年目（平成18年）に5名となりその後も10年目には2倍程度と増加のペースが速くなっている。これは、効果や人工内耳への不安から当初保護者の間に様子見といった感じがあったのが、実際に装用した子の効果の様子を見て手術に踏み切ったという背景があるように思う。また、補聴器でかなり効果を上げている子どもでも「もっと自然に音声言語で子どもとコミュニケーションを取りたいから」「補聴器では十分でない高音部など、より広範な周波数の情報を入れたいから」といった人工内耳への期待から人工内耳に踏み切る保護者も増えてきたのも増加の要因と考えられる。

その後は6年で約4倍と増加のペースはいっそう速まっている。これには、医療サイドからの積極的な働きかけがその背景にあると思われる。特に、ここ数年の増加に関しては、それが大きな要因になっていると思われる。また、平成18年に人工内耳の適応基準が100dBから90dBに引き下げられた時期と一致していることから、この基準の引き下げも関係しているようにも思われる。**図8**の数字には現れていないが、平成24年度乳幼児教育相談での装用者数は1歳児4名、2歳児7名である。これは、平成23年度の装用者が1歳児0名、2歳児1名に比べると驚異的な数である。それまでも2歳児で1～2名程度の装用者はいたが、1歳児での手術例は24年度から急激に変化したと言ってもいいと思う。今までは、幼稚部に入ってから手術をするケースが多かったが、手術年齢が1、2歳となってきたのもここ1、2年の大きな変化である。

今後は、両耳装用児が増える事が予想されるのでその推移も記録していきたい。また、手術時期の低年齢化が進むものと思われるため、手術年齢についても記録をしていきたいと考えている。

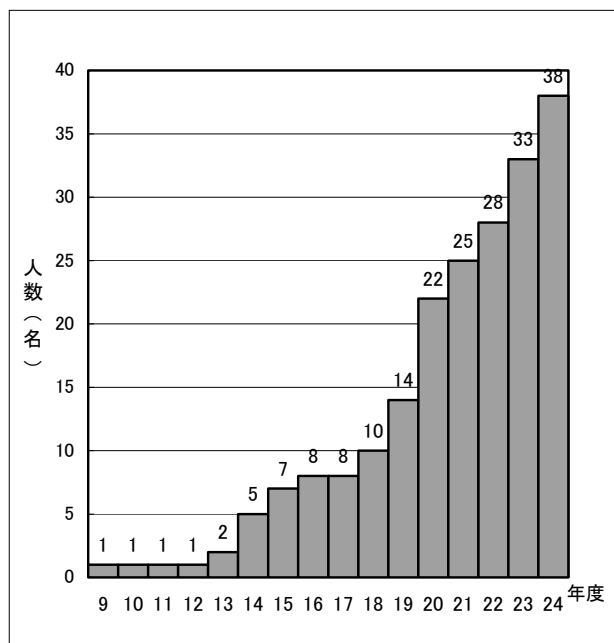


図8 幼児・児童・生徒における人工内耳装用者数の推移

### 3 今後の取り組み

今後は、聴覚活用委員会として補聴器に関する研修・人工内耳に関する研修を更に進めていき、発達段階に応じた聴覚活用の在り方を追求していきたいと考えている。また、聴覚活用委員を中心に各部の課題にも取り組んでいきたいと思っている。

資料：人工内耳に関する情報

(平成24年度保健室より)

資料：各部の聴力検査記録

(平成24年度補聴相談室より)